

平成 27 年度 佐潟植生調査等 報告書

新潟市環境対策課の小林氏、阿部氏と共に佐潟内の植物相調査およびアレチウリ（特定外来生物）の調査を 5 月 1 日から 11 月 11 日までの間に計 8 回実施した。

1. 植生調査について

(1) 希少種群生地の生育状況確認

第 20 回協議会（平成 27 年 3 月 25 日開催）にて示された希少種群生地の生育状況調査を行った。

- ① ヤナギトラノオ群生地：ヨシ群落中に 50 株以上生育しており、開花と結実も確認した。ただし、開花後にドクガと思われる幼虫により花や葉が食害を受け、結実が見られたのは 1 個体のみで、種子は未採集。ワスレナグサ（ノハラワスレナグサ？）との競合も見られるため、今後の管理について検討が必要。
- ② シラスゲ群生地：道沿いに生育を確認。個体数が多いため減少の心配は少ないと思われるが、舗装路沿いに見られるため、道路拡張による群落の消失などには注意が必要。
- ③ サデクサ群生地：湿地センター前に群生を確認。個体数は非常に多く、例年確認できる場所以外（ビオトープ予定地など）にも生育が見られた。

(2) 希少種の生育確認

主に園路沿いを中心に植物相の調査を行い、(1) に挙げた種の他に、オニバス、デンジソウ、オオトリゲモ、マツモ、ハンゲショウ、ミズタガラシ、タカアザミ、シロバナサクラタデ、ミズアオイ（潟外）を確認した。今年度はサデクサ、タカアザミが多く確認され、オニバスの確認数は少なく、ミズアオイとスジヌマハリイについては確認できなかった。特筆すべき種について以下に述べる。

- ① デンジソウ：以前に知られていた自然生態園の個体は確認できなかったが、佐潟水鳥・湿地センター前で確認された。この場所に生育する記録はこれまでには無く、由来は不明。確認された場所は土留めされた陸地であり、キレハイヌガラシなどの帰化植物と混在するため、今後衰退する恐れもある。
- ② ミズアオイ：潟内では確認できなかったが、水門を下った先の水路に多量に確認された。潟から供給された種子が発芽したものであるが、教育的な利用等も含め、有効活用も可能と思われる。
- ③ スジヌマハリイ：ミズアオイやミズワラビ、ウキゴケなどと共にヨシ狩り地の「ど」再生箇所を確認され、昨年より確認できなくなった。その原因としては、「ど」に繁茂するヨシの被圧が原因として考えられるため、「ど」の管理を検討することで復元の可能性も考えられる。

(3) ヨシ刈り地の変化について

2007 年から実施されたヨシ刈りにより、水際のヨシの衰退と陸側のヨシの繁茂、セイタカアワダチソウなど帰化植物の侵入などが確認されてきたが、今年度もその傾向は変わらなかった。「ど」の復元箇所には、セイヨウタンポポやワスレナグサ等の侵入がより顕著になっている。

(4) 浚渫土壌から出現する植物について

浚渫土壌置き場の 5ヶ所から、地下 40 cm、と 80 cm の土壌を採取し、その土壌を 2 cm の厚さで蒔きだし、出現する植物を調べた。蒔きだした土壌は、水深 0 cm と 5 cm、10 cm で管理した。

この土壌からは14種の植物が出現し、ヒデリコが約700個体と最も多く見られたほか、アゼナ(8)、オオトリゲモ(8)、ミズアオイ(8)、ウキゴケ(3)、ミズワラビ(5)、マツモ(2)、シャジクモ類(3)といった希少種も確認された。浚渫土壌は、佐潟水鳥・湿地センター前の升にも入れられ、そこにもオオトリゲモやマツモなどが出現した。

(5) 帰化植物について

県内で一般的に見られるセイタカアワダチソウやヒメオドリコソウなどの他、アレチウリ(御手洗湯)、キレハイヌガラシ、アメリカイヌホオズキ、シラホシムグラ、シャクチリソバなどを確認。その他、タブノキを食害する昆虫であるホシベニカミキリは以前は石川以西に生息していたが、近年新潟市内でも見られるようになり、佐潟でも確認されるようになった。

① アレチウリ：特定外来生物のアレチウリに関しては、佐潟内で依然確認されていた場所では駆除の効果もあり今年度は確認されなかったが、御手洗湯では今年度も確認されたため、7～10月にかけて確認と駆除を実施。

アレチウリは県内では1960年代に侵入したと考えられており(石澤、2006)、佐潟周辺数か所で確認の報告もあることから、今後新潟市一帯に広がる可能性もあるため、新潟市の小林氏と共に侵入経路と考えられた西川沿いに調査を実施したところ、9か所にて生育が確認された。また、県内におけるアレチウリの分布確認や駆除を行っている(株)エコロジーサイエンスの藤塚氏に話を聞いたところ、市内でも既に広範囲に分布しているとの情報を得た。

2. 今後の対策について

(1) 希少种群生地について

これらの群生地は外来種の侵入や水位変化、遷移の進行などによる環境の改変で急激に衰退する恐れもあるため、毎年の継続調査が必要と思われる。また、これら希少種の群生地については保護ゾーンとして人の手を入れないという考えもあるが、対象種を保護する目的での手入れは必要と思われる。特にヤナギトラノオ群生地についてはワスレナグサによる被圧が懸念されるため、駆除の可否について早急な検討が必要と考えられる。

(2) 希少種の生息域内保全・域外保全について

希少種については、継続的な生育調査と保全が必要だと考えられる。「ど」再生後に出現し、その後消失したスジヌマハリイやミズアオイ等については、江浚いを行うほか、「ど」に侵入するヨシは6月頃に刈り取るなど、管理を見直すことで再度復元できる可能性もあると考えられる。スジヌマハリイについては平成25年に採取した種子からの苗を再導入することも考えたい。

その他の希少種についても、種子の収集と保存を進めることが必要と考えられる。

(3) ヨシ刈り地の変化について

水際のヨシの衰退と陸側のヨシの繁茂、セイタカアワダチソウなど帰化植物の侵入などを今後も確認する他、今年度新たに実施したヨシ刈り地や「ど」の変遷の確認を実施したい。

(4) 浚渫土壌から出現する植物について

浚渫土壌からは多くの希少種が出現することが解ったため、今後、ビオトープなどでの活用や佐潟水鳥・湿地センターでの教育的な展示などにも利用できると思われる。

(5) 帰化植物とその対策について

アレチウリの対策においては佐潟だけでなく市全域の問題になるものもあるため、早急な対応が求められる他、これらの拡散には工事車両等が深くかかわることが解っているため、佐潟における工事車両等の進入には注意が必要と思われる。また、特定外来生物に関しては広く周知を行い、地域ごとに対応できるような体制作りが望まれる。